

(平成28年8月9日)

第19回 赤松小三郎研究会のご報告

日時 : H28. 8. 9 (火) 18:30~20:30
場所 : 東京・文京シビックセンター 4F A会議室
出席者 : 17名

< 配布資料 >

- (資料1)「赤松小三郎私記」ほかによって、新たに判明した史実(レジメ)～宮原安春さん
- (資料2)「赤松小三郎私記」等の資料に基づき確認された事項と新たな課題(レジメ)～滝澤進さん
- (資料3)寺島隆史氏 講演「幕末維新の上田」のレジメ(H22. 6. 6、於:池波正太郎真田太平記館)
- (資料4)小林利通氏「平成6年度上田市立博物館講演会資料レジメ」の一部

< 内容 >

1. 事務局より

- ・次回の研究会は10月15日(土)、歴史作家・桐野作人氏による講演会「薩摩から見た赤松小三郎」(14:30~16:00、文京区民センター3階A会議室)

2. 「赤松小三郎私記」等の資料に基づき確認された事項と新たな課題 ～滝澤進さん(61期)発表

- ・今回の発表で新たに参照した資料は、1)滝澤昌忠「赤松小三郎私記」、2)滝澤良忠「八木剛助の背景」、3)小林利通「平成6年度上田市立博物館資料レジメ」
- ・発表内容は、①これらの資料等に基づき今回新たに確認された事項、②新たな課題等、③根拠資料の確認が必要、の3点にまとめられたものだった。以下、ここでは①を中心にいくつか紹介する。

●今回新たに確認された事項(抜粋)

- (1)小三郎が海舟塾に入塾した経緯→山田貫兵衛(上田藩士で後に西洋流砲術世話役)の長男純一郎が海舟の門下生になったことから仲介役を果たした。
- (2)小三郎が長崎海軍伝習所に入所できた経緯等→安政3年上田藩も小三郎に期待し、海舟に入所を頼み、2人扶持の手当てを支給した。上田藩としては当面、欧米種の馬についての知識習得を課題として派遣した。
- (3)長崎海軍伝習所入所後の海舟との関係→小三郎は海舟の内侍として入所したが、安政4年、長崎に滞在中海舟から離れ、小笠原鐘次郎の従者として行動をとるとし、山田純一郎ほかと一時長崎から江戸に帰った。

(以下、新たな課題：長崎海軍伝習所で海舟の補佐役として重要な役割を果たしていた小三郎が海舟から離れたのは何故か、また小笠原鐘次郎の従者となった。)

(以下、根拠資料の確認必要：また、安政6年4月に海舟とは別行動で山田純一郎ほか3人と長崎から江戸に帰った。)

- (4) 「英国歩兵錬法」の翻訳とアプリン⇒元治元年11月、小三郎は門倉伝次郎に連れられて山田純一郎とともに初めて横浜のアプリンと会った。下曾根は小三郎に「英国歩兵錬法」の翻訳を期待したこともあり、元治2年2月には藩の許可を得て江戸の下曾根塾に再入門し、小三郎はアプリンの助言を借りながら翻訳した。
- (5) 小三郎の京都での開塾の時期、他⇒開塾の時期は柴崎新一「赤松小三郎先生」にいう慶応2年(1866年)2月ではなく、同年10月頃である。また、第二次長征が収束し慶応2年12月末に上田藩は京都から帰藩するが、上田藩に従軍していた小三郎は京都に留まり、脱藩に近い形で塾経営を続けた。
- (6) 京都での塾と薩摩藩等への出稽古について⇒開塾直後から会津藩屋敷での銃隊訓練が始まり、薩摩藩邸への出張と平行して行われていた。
- (7) 小三郎の京都での天幕一和のための活動⇒小三郎は天幕一和のため、慶応3年(1867年)8月の兄柔太郎あて書簡にある西郷吉之助、梅沢孫太郎、永井尚志、会津藩士などとともに、慶喜や老中板倉勝重など幕府中枢へも働きかけを行っていた。

(以下、新たな課題：小三郎の天幕一和のための活動のインパクトは、これまで考えられていた以上に大きかったのではないか、これに薩摩藩が強い危惧を持ったことが小三郎の暗殺につながったとも考えられる。)

- (8) 小三郎が最終的に帰藩命令を受け入れた経緯⇒会津藩は、小三郎を薩摩探索に用いたいと上田藩京都留守居の赤座寿兵衛に申し入れたが、その後会津藩は、薩摩が疑惑を向け始め、小三郎の命に関わると知ったためか、その態度が変わり、小三郎に帰藩を勧めるようになった。

(以下、新たな課題：小三郎と会津藩との係りについての研究。なお、上田藩が幕府からの内談を断った事情については不分明ではあるが、上田藩としても、八木剛助が中心となって軍備の近代化・強化を必死になって取り組んでいる状況の中で、自藩が資金援助までして育て、自藩の軍制改革でも一定の役割を果たした、小三郎の能力を自藩のために活用したいとの思いがあったことは容易に想像できる。)

以上

赤松小三郎研究会 事務局

荻原 貴 (79期)